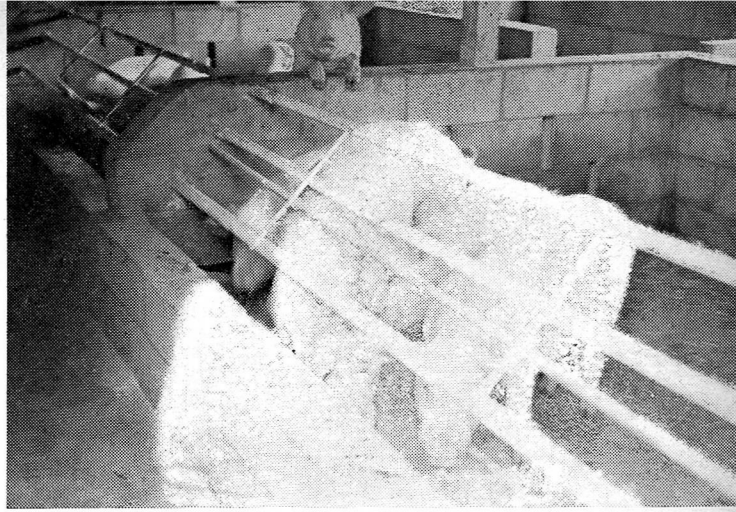


成功する 養豚養鶏経営

(三)

長田家広



養豚技術篇

一 仔豚はどんなものを選びべきか

肥育して肉豚として販売するにも、仔をとっていくための繁殖用としていくためにも、購入してくる仔豚は、母豚が三〜四分娩したものの子豚を購入して、最もよい仔豚であり、肉豚として仕上げていくためにも経済的に釣合う仔豚であり、繁殖用として基礎牝豚としておく場合も、これから出来る仔豚は、買いくる相手にも最もよく喜ばれる仔豚を生産するものである。

いままでの養豚事業は、専門家が少なく、肉豚自体の価格に波があり、常に肉値の上下が甚だしかったために、牝豚をもつていても一回仔をとると、そのうちの仔を二〜三頭次の繁殖用において、ほかの仔豚は販売するか、母豚は仔をとると喰い込む飼料量もかなり多いので、自分の家では飼育出来ないということと販売するのが慣習で、常に家におくものは初回分娩のものの子豚が、代々家の繁殖用として残ってくるというのであった。

ために三〜四回目の分娩仔豚は、母豚のよい能力を受け継いできているものであるが、養豚家の繋養している繁殖用基礎豚や肉豚用には、殆んどこれらの仔豚がいなかったことである。

今後の養豚経営においては、繁殖用基礎牝豚は少なくとも、三腹か四腹をとるべきであり、これから生産される仔豚と、買入れた仔豚からの肉豚が販売されていく、

一つの繁殖肉仕上消流のつながりをもった養豚経営として発達していかねばならない。

即ち豚の主産地形成が出来ていかなければならないし、豚の繁殖肥育の分業専門的な経営構造が、地域的に出来てこない、やはり今迄の養豚の仕方を踏襲するにすぎなくなり、肉豚の生産費をさげる経営も出来なくなり、消費者には肉の需要が伸びないことにもなってくる。

二 肥育用仔豚はどんな品種を選びべきか

仔豚生産者はどんな品種の仔豚をつくるべきか。

今後の肉豚用仔豚としては一代雑種を飼育していくべきだし、仔豚生産者は一代雑種をつくるべきである。

一代雑種をつくるためには、その基礎の牝豚は純粋のものでなければならぬので、繁殖家は純粋のものを必ず養って、これも若い基礎豚でなく、牝豚は前に述べたように三〜四回以上、仔をとっていくように養っていくべきである。

一代雑種をつくるためのかけ合わせ方についてはここでは省略する。

一代雑種の牝豚は次の繁殖には使わないで、肉用として出荷してしまうこととしたい。

三 仔豚を収容する上で、どんな点に注意したらよいか

一 豚房に入れる仔豚は、各地で生産された母豚の異なる仔豚を雑居させることをしてはいけない。

一 豚房に入れる仔豚は同じ母豚から出た仔豚全部を収容すべきである。

とくに月齢の違った若豚を同じ豚房に入れることはないとされるが、Aの生産者の仔豚と、Bの生産者の仔豚を同居させるとか、A町の純粋種とB村の一代雑種を同居させて、肥育に入るような管理をしてはいけない。この方法をするとき必ず皮膚病が発生するか、消化不良のものをつくってしまうことになる。

母豚が仔豚を生産して、この仔豚を肥育用にする場合、生産したその豚房においては仔豚を肥育し、母豚を他の基礎豚房舎に移す方法が最もよい管理になるもので、仔豚は生まれた所の馴れた環境のその豚房で一生を過ごすのが最もよいものであるが、仔豚を購入して肉用にせざるをえない場合が多いが、この場合は三日以上も輸送時間がかかるような場所から、しかも生後四〇日以内のものを遠隔地から購入してきてはならない。

こう考えてくると素性の良くしれた基礎豚がすぐ傍におり、何回目の分娩仔豚からもよく知れるし、母豚につけた日数もよく判る所から購入することが望ましいし、こういう仔豚生産と肉豚飼育とが一つの鎖でつながったような運営が、養豚経営に早急に取入れられていかなければならない。

四 母豚は年何回分娩させるべきか。母豚として備えておくべき条件はなに

一 豚房に入れる仔豚は、各地で生産された母豚の異なる仔豚を雑居させることをしてはいけない。

年二回分娩させるといふのでなく、春仔豚として導入してきたものであれば、翌年から年二回は分娩させて、仔豚を一腹平均して一〇〜一二頭程度とするように、しかも少なくとも六腹は分娩させていくように、母豚を管理していかなければならない。

母豚は脚が強く、乳頭が一四以上あるものを母豚とすべきで、脚を強くするためには十分な運動をさせて育成していかなければならない。内股歩きのものは脚が弱い。母豚は腰骨幅の広いものがよい。

母豚の泌乳は分娩後四〇〜四五日頃に最も泌乳量が多くなってくるので、この時期に仔豚を離すと、乳房炎をおこし易いので、仔豚は少なくとも五〇日はつけておきたい。

五 肥育豚は何カ月で仕上がるとよいか
肥育して出荷するまでには長くて、生後六ヵ月で肥育を終わってしまうことが望ましい。またこれ以上早く出荷出来るために一代雑種を飼育するようになってきたが、六ヵ月以上経過しても九〇斤にならない場合は、少しぐらいの肉値がおちても出荷すべきである。これ以上飼育しても飼料価格は決して安くあがるものでもないし、豚房や豚舎の回転を多くする方が利益は多くないので、手間や飼料電気料などの経費をかけて飼うべきではない。

そのためには仔豚時代に下痢をさせてはいけなしいし、皮膚病にかけても、寄生虫が寄生してもいけない。

離乳は環境が変わることであるし、離乳後他の地帯から導入されてくることも、環境

が変わることであるし、環境を変えて一ヵ月間か、肥育経営において最も経営の山ともいえるので、大体生後三ヵ月頃までは管理に充分気を配らなければならない。

生後三ヵ月以内の下痢を一週間も続けると、この仔豚の肥育期間は少なくとも一ヵ月は延びてくる。

仔豚の豚房は湿気が多いと腹がひえて、下痢をおこしてくるので、豚房の床には敷わらを入れるとか、床をしめらさないように管理してやるべきである。

生後の月数が五ヵ月以上になってくると、肥育していく度合に対して、飼料を多く喰うようになり、喰っただけで多くの肉がつくものでないので、飼料費が多かかってくる。

仔豚の時はれいしよや、屑米や、雑炊飼料や、水分の多い飼料を与えると、豚はこじけてくるし、下痢も起こし易くなる。

仔豚時代ほど良い蛋白質飼料（魚粕と大豆粕）を適正に与えず、澱粉質飼料が多ければこじけ豚となるので、消化のよい蛋白質飼料を配合してやるとか、これが適正に配合された飼料を与えねばならない。

飼料を水で与えても、手で握って水が指の間からしたりおちるような水の加え方をすると、豚は何時もブルーいって動き回し、小便回数もふえて、静に豚房にねることがない。

いもサイレージをつくって与えて、飼料費が一頭当五、八〇〇円程度の安い飼料費に終わっていると、肥育期間が七ヵ月、八ヵ月も経過していくとすると、これは薄

利多売ということにはならなくなる。

豚舎に五〇頭収容出来るとすれば、五ヵ月で肥育出来れば、一月から五月まで毎月一〇頭ずつ五豚房に豚を入れていけば、第一番目の一月の導入豚房には六月下旬には第二回目の肥育用仔豚一〇頭が入房出来るし、二号豚房までの合計七〇頭が、その年のうちに出荷出来るが、一豚房の肥育期間が八ヵ月もかかれば、五〇頭収容豚房は五〇頭しか出荷出来ないことになり、豚舎の回転度は低くなり、資本の回転は低し、それだけにもうけも少なくなっていくものである。

即ち五〇頭収容豚舎には年間何十頭の豚が収容出来るようにしうるかが経営のこつである。

料理屋や飲食店などにおいても、今日は座敷が何回廻ったとか、女中さんが三回廻

ったと良く言っているが、これは店がもっている部屋数が五つあったとすると、二回廻った場合は、どの部屋にも客が二回ずつ入り合計一〇組の客が部屋を利用したことになり、この廻る回数が多い程、その店は繁昌していることになるわけである。

六 肥育計画はどう計画するか

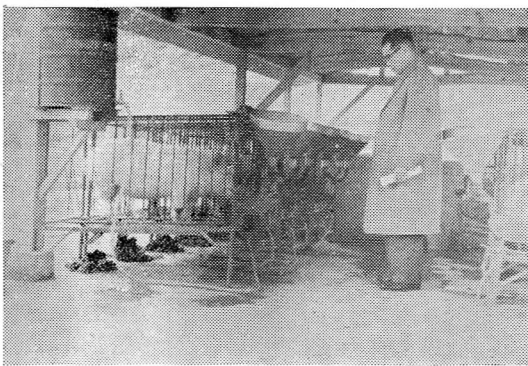
養豚は初めてからすぐ毎月五頭なり一〇頭なり、ある一定の数を定期的に出荷することは出来ないが、一年に冬だけ出荷するというのでなく、毎月定まった数が出荷しうるような状態にしていかなければならない。

そのためには毎月或る一定の仔豚を豚房に収容していくべきであるし、毎月入れられる仔豚が生産されておらなければならぬ。

それだけに仔豚生産計画と肥育計画とが一致していくべきであり、そのためには仔豚生産農家群か、仔豚生産基地或はセンターと肥育農家群との一環した連繫計画が計画され、遂行されていかないと、豚の価格の上り下りの幅を大きくすることにもなってくるものである。

七 養豚センター（肥育センターと繁殖センター）はどういう考えて計画するか

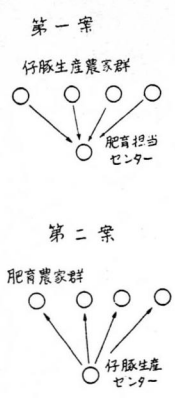
養豚センターは共同経営で運営するか、農協や団体で運営するかの二つの方法があるが、センターは種牡豚と種牝豚を繋養して仔豚を生産し、仔豚を分配するか、或は仔豚を集めて肥育専門の業務をするかに分けるが、養豚経営においても消費地に対し



て生産物を供給する量を生産する迄の生産基盤が、一気につくりあげうるものでないで、漸次つくりあげていく過程では、る運センターが仔豚生産と肥育も合せて実施する管理方法をとらざるをえないが、年間毎月五〇頭や一〇〇頭の肥育豚が、消費地に必要とする数量を定期的に、また品質のととのったものが生産し出荷出来る態勢になりうる状態になった時、仔豚生産と肉仕立業務とはおのずからセンターと、これを取巻く肥育業務者とは分離されていき、センターの業務はどちらかに專業化されていかなければならない。

仔豚の生産の技術をもち経験が豊富であれば、これを農家群に担当させて、肥育をセンターが担当し、常にセンターが経験のない業務を担当していくようにすべきである。

農協や団体がセンターを運営する時はもちろんのことであるが、農家同志の中からセンターを設けた時においても、これを受けて立つた農家との取引契約については、試算の上で或る一定の取引価格を設定して、これに基づいて取引を行ない、それぞれの部門を独立採算制として、剰余金を決算時に分配するような運営を行なうことが望ましい。



八 うまく運営されているかどうか

この評点はどこに指標を置いて運営すべきか。
 養鶏においての指標をあげてみると次の通りである。

- 一羽当たり育すう施設費 六〇〇円以内
- 育すう施設費却費 三〇〇円以内
- 年間平均産卵率 六五%以上
- 平均卵重 五五g以上
- 年間へい死羽数 年内五%以下
- 育成率 ひな九〇%以上
- 一羽当り育成費 五六〇円以内
- 一羽当り飼料消費量 四〇〇g以内
- ひな一羽当り飼料費 一四〇〇円以内
- 衛生費一羽当たり 二〇〇円以内
- その他の諸材料費一羽当たり 三〇〇円以内
- 一羽当たり年間鶏卵生産量 一三t以上
- 飼料要求率平均 三〇
- (総生産卵の重量でくわせた飼料総重量をわ)
- 成鶏一羽当たり借入金額 一、〇〇〇円以内
- 豚一頭当たり飼料要求率 三三以内
- (導入仔豚から出荷するまでに発育した体重でくわせた総飼料費をわ)
- 繁殖牝豚の分娩回数 年二回分娩
- 一腹の仔豚生産数 八頭以上
- 基礎牝豚乳頭数 生きている乳頭十四
- 九〇gまでの肥育期間 生後六ヵ月以内

九 家族や生産にたずさわる人間同志の意識や考え方、人間関係の近代化をはかるべきだ

農業で立派な自立経営をしているとみられる農家を見ると、経営と生活との関係や、

また経営に参加している家族の間に、合理化された経営の考え方なり、新しい確乎たる技術の取り入れや、今迄にみられなかった簿記を通じての経営の診断なりの経営観など、その他色々新しいなにかがとり入れられている場合が多い。

上川支庁管内のHのおばあさんの経営においては、過去一〇年間は繁殖牝豚三頭を置いて仔豚の生産をし、一方肥育も年間に五頭の出荷を続けてきていたが、年をとって余り動けなくなったこともあり、豚をお嫁さんに渡して、だんだん大きくなってきた孫とにわたりを飼うことにし、一年間研修会や講演会に常に出てはにわりの飼いを勉強して、二年目にひなを入れて成鶏三〇〇羽を飼ってみて、三年目には成鶏一、〇〇〇羽を孫さんと飼育して、年間常に補充して常時一、〇〇〇羽飼育をしつづけ、お嫁さんの豚とおばあさん孫さんのにわとりで、年間二五万九千円の粗収入をあげている経営がある。豚で経験してきた動物に対する基本的な生理に対する飼育技術で、にわとりではにわとりの生理に対する理解力と、おばあさんという年令が或る技術指導者の注意や助言にのみ専一に従っていくこと、孫さんの産卵の記録が、こういう成績をあげている賜となっているものと思われる。

根室管内のM氏は大学を卒業して農協に奉職していたが、獣医師でもあったが、父親の経営をうけてしぶしぶながら、経営を引受けたが、今日では押しも押されもしない村での篤農家で、三十九才程度で立派な

農民指導者になっている。
 この経営においては父から財布をあずかって夫婦二人でつくりあげるまでの苦労は一方ならぬものがあつた。
 経営計画設計をたてるために、指導者を招いて旅館にとまり込んで、二日間びっちりかかって五ヵ年計画をたて、これに対して一途に向かつて毎年の反省を積み重ねて経営を進めてきたが、赤ん坊を背に背負ってトラクターの運転をした年もある程であり、単年度に一八〇万円の借入償還金を返済せねばならない年もあつたが、三〇〇万円以上の収入をあげる経営に到達している。

またある農家S氏をみると、経営と収支を克明に記録して、経営の実態を自分で納得のいくようにつかんでみることははじまつた。
 収支はたしかにかなりのものがあるが、一年をへてみると組合勘定をつかて、経営経費を計画的にやってみたものの、なものこっていないことがわかつた。
 結局現金があれば、それがなんととはなしにつかわれてしまつている。
 もし災害や値下りにでも会つと、一ぺんで経営はひっくりかえることを知り、記録を基礎として、家族全員に実情をうちあけて、いくつかの申合せをみんなでし合つた。

まず母親からサイフ権を自分に渡してもらい、生活に必要な共通経費は記録をもとにして、計画的に消費することし、家族には月々一定の額を月給として渡すことなどを実施していき、明るい自立経営を進めている。(道立道南農業試験場 専門技術員)